東洋大学「経済論集」　27巻1・2合併号　2002年2月

初期工業化都市の職業構造
－18世紀後半のマンチェスター－

道　重　一　郎

目　　次

1　はじめに
2　マンチェスターの職業構成
(1)　職業構成の概観
(2)　製造業の構成と関連商業
(3)　経営者数から見た経営形態
3　消費財の流通構造
(1)　食料品の流通
(2)　服飾品の供給
(3)　その他の消費財と流通
4　おわりに

1　はじめに

18世紀イングランドは社会全体が急激に都市化した時代である。17世紀の末，グレゴリー・キングは全人口の約25％が都市に居住していると考えていた。1世紀後，アーサー・ヤングはその比率が50％に上昇したと算定した。このように都市化が進んだイングランドのなかで首都ロンドンの位置は別格に大きく，19世紀の初めには人口が100万人を超えるまでに成長した。しかし，成長した都市はロンドンばかりではなく，イングランドの都市化は他の地方都市の成長によっても支えられていたのである（Corfield［1982］pp. 7-16)。

このような地方都市の成長は，工業化の進行とともに成長したマンチェスターやバーミンガムなどの工業都市，リバプール，ホワイトヘブンなどの港湾都市，バースやターンブリッジウェルなどのリゾート都市などの発展と結びついたものであった。都市化の進行は都市を基盤とする新しい文化の成長を促すものであった。「イギリス都市ルネサンス」と名づけられたこうした都市文化は，建物の外観，リゾート都市に最も典型的に現れた余暇サービスの拡大，都市生活で拡大さ

れた消費財の消費などを含むものであった（Borsay［1989］p. viii）。そして新しい都市文化を担った社会層は「上品な」生活様式を希求する都市の中流階層であった（道重［1999］pp. 89-93）。彼らはジェントリ層の生活を模倣するという側面を持ちながらも，それに留まらず地主エリート層ともまた下層民衆とも異なる自覚的な意識を18世紀の都市文化の中から生み出し，19世紀の中産階級文化へとつながる社会的な意識の原型を形づくることになった。

一方，都市化の進行した18世紀は，その後半に産業革命期を含んでいる。確かに工業化に伴う都市人口の増大は極めて大きいものがあった。しかし，都市化そのものは18世紀の前半から次第に拡大したものであり，18世紀のイギリス都市化の原因を産業革命のみに限定する事はできない。むしろ，17世紀後半から徐々に進行したイギリスの経済発展全体の中で，都市化の問題も位置付ける必要がある。そこで，本稿では産業革命の開始期といってもよい1770年代初頭のマンチェスターの職業構成を分析し，これを通じて産業革命の中心地における工業都市がその初発の段階で，どのような性格を持ったかについて検討しようとするものである。

ここで使用される史料は1772年にマンチェスターで最初に作成された商工人名録directoryである[1)]。マンチェスターの商工人名録は繊維工業史研究の史料として非常に早くから利用されてきており，1772年のものはダニエルズによって繊維工業の職業分析に用いられている（Daniels［1920］）。また1773年と81年のものはワーズワースとマンの研究のなかで，綿工業の発展を跡付ける史料として利用されている（Wadsworth & Mann［1931］）。そこで本稿では，1772年の商工人名録を利用して，繊維工業のみならずその他の産業分野をも含めて，とりわけ消費財の流通に重点をおきながら，初期工業都市マンチェスターの社会構造の一端を明らかにしていきたい。

ところで，市内外で取引を行う人々の便宜を図るために作成された商工人名録のもつ性格を，あらかじめ明らかにしておきたい。この商工人名録はマンチェスターおよびこれに隣接するソルフォードの都市域内部で，自立的に営業を営む人々の姓名と職業もしくは地位，さらに住所が街区ごとに記載されており，付録としてマンチェスターに倉庫をもつ市外の業者の一覧，定期馬車の発着時刻表などがつけられている。したがって，一般的な職業調査や人口調査とは異なって，マンチェスター住民全ての職業を明らかにしているものではなく，労働者などは含まれていない。その意味で，この史料からはマンチェスターの職業構造全体を明らかにする事はできないが，18世紀の都市文化を支えた中流階層に焦点を当てるならば，彼らの工業都市内部での地位をより明確にする事ができるものと思われる。

1）史料として用いる商工人名録Directoryは，E. Raffald（ed.）*The Manchester Directory, For the Year 1772*（Manchester, 1772）である。なお，商工人名録は，ロンドンなどでは17世紀の後半から刊行されるようになり，1730年代以降になると頻繁に更新されている（Atkins［1990］pp. 34-9）。しかしマンチェスターで18世紀中に刊行されたものは1772年が最初で，その後73年，88年，97年の4点が刊行されている。

2　マンチェスターの職業構成

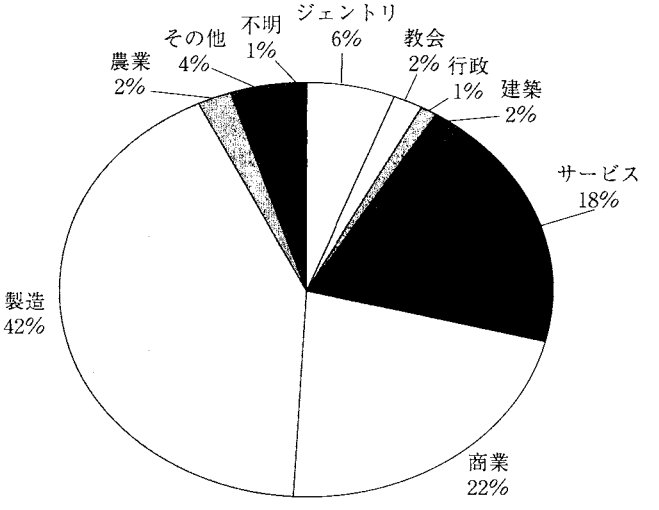
(1) 職業構成の概観

1772年のマンチェスター商工人名録本文の記載数は，合計で1496件である。氏名が最初に記載され，次いで職業名，街区名が記されている。職業名はかなり多様なものを含むが，整理のためにこれを9つの分類項目に分けて，マンチェスターの職業構成を概観してみることにしたい。

第1図は，9分類に職業名の記載されていない不明16件を加えた10項目をグラフにあらわしたものである。職業名といってもジェントリの項目は本来地位を示す語であり，特定の職業をさすものではない。この項目には，「州の騎士」1名，エスクワイア32名，ジェントリ55名およびレディ1名を含んでおり，総計89名と約6パーセントに上る。通常，ジェントリは地主層を指すことが多いが，実際にはその内容は多様で，特に都市で肩書きとして用いられる場合には特定の職業と結びつける事は難しい（Mingay［1976］pp. 1-16. またコーフィールド［1997］をも参照）。

たしかに市内とともに明らかに郊外に居館をもっていると思われるジェントリは地主層の可能性が強いが，多数のジェントリは市内の主要な街区に居所を置いており，主たる生活の根拠は市内にあり，これらを地主として一括する事はできない。例えば商工人名録本文にエスクワイアとなっているE. Byronと W. Allenは巻末付録の銀行･保険事務所 Manchester Bank and Insurance Officeに称号抜きで名前があり，他方本文では銀行家として記載されているE. Placeは，この巻末付録ではgent.という称号を付されている。このようにジェントリ，エスクワイアなどの称号やタイトルをもちながら商工業に従事する事は決して例外ではない。むしろ，職業は特定できないに

第1図　マンチェスターの職業構造（10分類）



しても，社会的な地位が相対的に高い商人層などの富裕層が多く含まれる可能性は高いものと思われる。

また，ジェントリは一般的に治安判事など地域の名望家として司法，行政的な役割を担う事も多いが，少なくともここではジェントリに分類された89件のうち，明瞭にこれをうかがわせるものはない。行政的な職業は，ジェントリ層以外を考えても少ない。物品税の徴収役や道路税徴収役，そしてシェリフ役員などが行政的な職業に分類されているが，これらを全てあわせても13件で，全体の1％にも満たない。18世紀後半においてもなお，マンチェスターは法制上は自治都市ではなく，1833年の議会改革で初めて議席を与えられたものの，自治権を持つ都市としてマンチェスターが成立したのは，1844年にマナー領主であったモズレー家から領主権を買収した時であった（Redford［1939］p. viii)。確かに四季裁判所の開催地としてマンチェスターは司法，行政の拠点としての機能を周辺地域に対して果たしていたが，治安維持や公衆衛生などの都市機能は領主裁判所 Court Leet を中心におこなわれており，有給の都市職員を大量に有する必要はなかった[2)]。

ジェントリ層と並んで，商工人名録において厳密な意味で職業分類になじまないものとして女性の存在がある。女性は，Miss，Mrs.あるいは Widow のような形の記載が，職業欄と並んで，あるいは職業の記載なしに存在している。女性の大部分は寡婦で，その他に分類した職業名の記載のない女性53名のうち43名が寡婦である。こうした多数の女性の存在が何を意味するものなのか商工人名録は何も示してはいないけれども，これだけの数が存在する以上記載する何らかの必要性があったものと思われる。ジェントリ，職業名のない女性そして牧師を初めとする教会関係者を加えたものが，マンチェスターにおける非経済的な職業である。これらは総計173件で全体の11％強を占めている。これに加え不明16件を除いた1307件，87％がとりあえず経済的な活動に従事していたものと考えられる。

これら経済活動に従事していたと思われる職業のなかで，圧倒的多数を占めているのが製造業分野であり，全体の42％強を占めている。なかでも繊維関係の製造業は非常に数が多く，331件で全体の五分の一をこの分野だけで占めている。また，本稿では紡績や織布だけではなく，最終消費財としての服飾材料の生産に従事しているもの104件も繊維関係製造業に区分しているが，これらを考慮したとしても，マンチェスターが工業，ことに繊維工業に大きく依存した都市であった事は明らかである。製造業に次いで多くの比率を占める商業分野（22％）にしても，繊維工業に関係するものが約2割とやはりかなりの比重を占めている。しかし，この分野では小売機能をもったと考えられる倉庫業 warehouse を含む商業一般や食料関係商業などの消費と直接結びついた業種がさらに多く，こうした点は工業的成長に伴って増大した人口を扶養するための消費財

2）領主裁判所の役割や機能については，道重［1989］p. 51 および p. 74。

第1表　職業分類とその内容

職業10分類	内　訳	件　数	内　訳	備　考
ジェントリ等		89		
教　会		31		
行　政		13		
建築・土木		37		
サービス	飲食業		133	
	サービス		42	
	医療・理容		39	
	運送業		24	
	教　育		20	
	情報商業		11	
小計		269		
商　業	商　業		126	
	食料商人		80	
	服飾品関係商業		44	
	家庭用雑貨商業		35	
	繊維関係商業		32	
	木材商業		10	
小計		327		
製造業	繊維関係製造		331	
	服飾品関係生産		104	
	機械器具製造		43	
	木材加工		43	
	皮革製品製造		40	
	金属加工		29	
	食品加工		28	
	家庭用雑貨製造		17	
小計		635		
農業・園芸		26		
その他		53		女性
不　明		16		職業記載なし
総計		1496		

市場が拡大した事をも示すものと思われる。しかし，製造業や商業については改めて検討する事とし，ここではこれ以外の職業分野に関してやや詳しく見ておく事にしたい。

マンチェスターの以上のような工業都市的性格から見て，商工人名録に農業的な職業が少ない事は当然であろう。他方で，急激に都市化が進行していたにもかかわらず，建設関係の職業も決して多くはない。わずかに特徴として見られるのは，レンガ建設業（11件）と漆喰業者（8件）が，石工や大工に比べて多いことである。教会など大きな建築物は別にしても，一般的に比較的安価で資材調達の容易なレンガを素材として利用した建築物が多かった事を反映したものと思われる。

飲食業を含むサービス分野は，職業9分類の中では製造業と商業に次いで多くの比率を占めている。この分野には飲食業の他に医療，運送，教育，出版等が含まれ，また弁護士などの狭義のサービス業も含まれている。しかし，なかでも圧倒的に多い業種は133件の飲食業であり，とり

わけ飲食提供業 victualler が 85 件と多い。この業種は食料品の供給が主な仕事とされるが，ほとんど全ての記載で「碇亭」Anchor や「天使亭」Angel などの屋号をもち，単に食料品を販売したのではなく，飲食を提供したものと考えられる。インは飲食提供業に次いで 38 件を数える。インは旅籠などと訳す場合もあるが，単純な旅客宿泊施設ではなく，飲食の提供からさらに商工業者に対する商品倉庫の提供，取引場所の提供など幅広い機能をもったとされている（Everitt [1973]）。1729 年にマナー領主であったオズワルド・モズレーの発案で取引所が「市場広場」Market Place に建設されるが，魚商人や肉屋も同時にこの施設を利用したために，他の商工業者は取引所をほとんど利用しなかった。1804 年になって商工業者が広く利用しうる取引所が建設されるまで，マンチェスターにおける商取引もインやコーヒーハウスを利用することになったのである（Makepeace [1985] p. 33）。ただコーヒーハウスは商工人名録でみる限り，どちらも「取引所通り」Exchange に所在しているが，2 件と少ないので，多くの取引はインなどでおこなわれていたものと思われる。

飲食関係に次いで多いサービス分野の職種は 20 件の弁護士 attorney である。この職業は，法律にかかわる係争の代理人を勤める事をその本来の職務としているが（Campbell [1747] pp. 69-73），資金移動の媒介者としての機能も決して小さいものではない（Anderson [1969] p. 20）。弁護士は，四季裁判所などにおける法律関係の業務によって築いた人的ネットワークを通じて，不動産抵当などを利用しながら少額なものも含めて余剰資金を必要な産業投資に誘導をする機能を果たしていた（Hudson [1986] pp. 211-17）。したがって，マンチェスターに一定数の弁護士が存在した事は，四季裁判所の開催地として司法サービスの拠点としての機能を果たすとともに，ランカシャー南部における資金移動に関しても重要な拠点として機能した可能性が高い。

医療・理容の職業が弁護士に続いている。このなかでは床屋の数が最も多く，鬘屋を兼業しているものも含めると 25 件に上る。逆に床屋を除くと，医師の数は助産夫を含め 14 件である。商業に分類している薬剤業 druggist や薬種商 apothecary 計 9 件を含めても，医療関係者は人口千人に 1 人である。また教育も広義のサービス分野に分類されているが，校長 school master が 6 人，独身女性の経営によるおそらく女子用の寄宿学校が 3 件であり，これでマンチェスターの学校の全てであるとすれば，学校の数は決して多くはない[3]。他方，書き方教師 6 件，数学教師 2 件と並んで，少数ながら音楽教師 1 件，ダンス教師 2 件が見られる事は，地方の工業都市の中流階層にとっても都市的な文化の享受が少しづつ進んでいた事を示すものといえよう。

運送業は教育とともに 20 件台である。しかし，1772 年の商工人名録の巻末には 50 件の定期運行馬車のリストがあり，73 年には 144 件のリストがある。1 年間でこれだけ増加したのは不自然

3）産業革命期まで徒弟制度による職業教育が一般的であり，19 世紀半ばに至っても一般的な大衆向け初等教育の水準はきわめて貧弱であった点に留意する必要がある。原 [1982] を参照。

で，おそらく72年のリストが過少であったと思われるが，いずれにせよマンチェスターを通過した，あるいは基点とする運送業者の数は決して少なくない。これは，ピックフォードのような主要な運送業者が，輸送ルートにより便利な場所にその拠点を置き，インなどが発着場所を提供したからである（Turnbull［1979］pp. 19-20)。逆に商工人名録に現れているものは，市内の輸送を担う荷馬車屋 cater などが中心となっている。

以上のような職業構成から見ると，18世紀後半のマンチェスターは製造業を中心とする工業都市であったと一応位置付ける事ができるように思われる。同時にこうした経済的な発展を支えるサービス分野なども一定の成長を見せている。しかし，建築や教育分野の職業人口の少なさは，大規模な都市的な成長を支え，また文化的な発展を示すような職業が，まだ決して多くはないことを示している。とはいえ，マンチェスターは，産業革命を牽引した代表的な工業都市の一つであり，その中心は製造業であった。そこで次に製造業およびそれに関連する商業など，この町の経済活動を担った職業を，これまでの研究を利用しながら，簡単に整理しておく事にしたい。

(2) 製造業の構成と関連商業

この時期のマンチェスターにおける製造業の主役は繊維工業である。そのなかでも，同時代に書かれたエイキンの著作にも示されているように，綿工業の発展につながるファスチアン織，またチェック織，そして布テープなどの小幅物類 smallwares がその中心をなしていた（Aiken［1795］pp. 157-63)。こうした繊維工業の発展についてはダニエルズやワーズワースとマンの共著などによって検討されている。ダニエルズは1772年の商工人名録の内，繊維工業関係の人数を一覧表にしている[4]。一方，ワーズワースは73年と81年の商工人名録を利用して，これら産業の発展を明らかにしている。そこで本稿では，繊維工業について72年の商工人名録の内容を簡単に見た上で，彼らが取り扱っていない製造業や商業との関連について検討していくことにしたい。

綿と麻の交織であるファスチアン織，刷毛糸を主な原料としてエプロンやガウンに用いられたチェック織，そして布テープやレース，縁飾りなどに用いられる小幅物がこの時期のマンチェスターにおける主要な繊維製品であったが，商工人名録によればこれら以外にも絹や麻，あるいは各種毛織物の生産も行われていた。このなかではファスチアン織に関連する業者が圧倒的な多数を占め，繊維工業の中心になっていたことは明らかである［**第2表**］。ファスチアン織，チェック織，小幅物，絹など複数の織物と関連する製造業者の存在も見受けられるが，ファスチアン織の成長を軸として，他の部門を統合していく傾向は，18世紀末のマンチェスター繊維工業の全般的な動向と考えられる（Wadsworth & Mann［1931］p. 253)。

4）Daniels［1920］pp. 67-70. なおダニエルズの職種別分類の数値は本稿のものとは若干相違があるが，兼業等の算定の相違と思われる。

製品を問わず，仕上げと染色とを含めて，繊維製造の分野でもっとも多い職種名は，「製造業者」manufacturer である。各種毛織物については生産者 maker とか織布業者 weaver などの職種名が若干存在するが，基本的には製造業者が中心的な位置を占めている。このような繊維産業の製造業者は，直接生産に携わるというよりも周辺地域の生産者を統合する商人的な役割を担ったとされ，ワーズワースによれば「仕上げ工程の多様化の拡大と市場の発展にともなってマンチェスターの製造業者は直接の雇用者というよりも仲介業者や商人的な存在となる傾向があった」とされている[5)]。

製造業者の商人的な機能は生産者に対する原材料の提供に限定されていたわけではない。商工

第2表　繊維製造業の内容

職　　種	取り扱い商品	件　　数	兼業の内容
製造業者 (manufacturer)	ファスチアン	57	
	チェック	43	
	小 幅 物	37	
	ファスチアン・チェック	13	
	紡毛毛織物	7	
	絹 ・ 麻	5	
	小幅物・ファスチアン	5	
	ファスチアン・絹・麻	3	
	ファスチアン・紡毛毛織物	3	
	絹	1	
	小幅物・チェック	1	
	小幅物・縫糸	1	
小計		176	
織布業者 (weaver)	絹	5	
	縫取り織機	3	
	ウーステッド	2	
	オランダ織機	1	
	小 幅 物	1	
小計		12	
生 産 者 (maker)	シャグ織	4	
	ケンダル刷毛織	2	
	キャムレット	1	
	バス織	1	
	フリーズ織	1	
小計		9	
製造業者・兼業	小 幅 物	1	羊毛商人
	チェック	1	捺染業者
	チェック	1	紡毛反物商
	ファスチアン	1	行 商 人
	小 幅 物	1	ズボン製造業者
	紡毛毛織物	1	紙製造業者
小計		6	
紡毛業者		3	
織元・兼業		1	乾 塩 商
総計		207	

5）Wadsworth & Mann［1931］p. 251。またヨークシャーの製造業者については Wilson［1971］がこの問題を扱っている。最近の動向としては，Hudson［1986］および Smail［1999］をも参照。

人名録のなかで商業に分類した者のなかには，ファスチアン織など製品を明示した者は見いだせないが，その一方で製造業者の販売活動をうかがわせる史料も残っている。18世紀の半ば，サセックスの小売商T. ターナーはかなり詳細な日記を残しているが，このなかでマンチェスターの製造業者らしき人物と取引をおこなった記述を残している（Vaisy (ed.) [1994] p. 245, 287)。ターナーは1762年と64年に，マンチェスターのサム・ライディングという人物の息子ジョンおよびその雇い人とサセックスの都市ルイスで，マンチェスター製商品の取引をおこなっている。72年の商工人名録にはサム・ライディングという人物はいないが，ジョン・ライディングというファスチアン織とチェック織の製造業者が存在している。この人物がターナーと取引をした者であるとすれば，マンチェスターの製造業者は本人あるいはその代理人を通じてかなり広範囲に商品を販売して回っていたものと思われる[6]。その意味で，マンチェスターの繊維製品にかかわる製造業者は製造から卸売り販売まで，一貫した経営活動をおこなっていたものと考えられる。

製造業者がこのように商人的役割をかなりもっていたとすれば，マンチェスターの製造業を実際に担っていたものは，仕上げや染色部門と言ってよいであろう。ファスチアン織の裁断業者(23件)，艶出し業者（13件）を先頭に合計67件にのぼる各種製品に専業化した仕上げ業者群およびファスチアン織染色業者（11件）を始めとする染色・捺染業者合計48件の存在が，この地域の繊維工業の中心地としてのマンチェスターの機能を支えていたものと考えられる[7]。

他方，繊維製品に関係する商業において，もっとも多い職種は糸商人 yarn merchant の15件であるが，彼らがどんな種類の糸をどのように販売したかは明らかではない。だが，糸商人とファスチアン織製造業者を兼ねるものが1件，チェック織製造業者を兼ねるものが2件存在し，糸商

第3表　繊維関係の商人（織物商を除く）

種　別	兼　業	件　数
糸 商 人		15
糸商人・兼業	チェック製造業者	2
糸商人・兼業	糸 生 産	1
糸商人・兼業	ファスチアン製造業者	1
小計		19
綿 商 人		4
糸・綿商人		3
綿横糸商人		2
麻 商 人		1
ウーステッド商人		1
綿商人・兼業	チェック製造業者	1
羊毛商人・兼業	タバコ商人	1
計		32

6）製造業者が各地に派遣した販売員 riders-out の活動については，Wadsworth & Mann [1931] p.239. また道重 [1989] p. 108 を参照。

7）その意味で紡績業者がこの時期にはまったく現れておらず，準備工程の職種も極めて僅かなものである点は，興味深い。紡績業からはじまる産業革命の影響はこの段階のマンチェスターにはまだ現れていない。

人と繊維製品の製造業者との間に何らかの類縁関係が存在していたことをうかがわせる。マンチェスター市内では紡績や織布が広範におこなわれてはいなかったと思われるから，糸商人も周辺の紡績業者から糸を集荷し，織物製造業者や織布業者に糸を卸していたものと思われる。繊維製品を取り扱う商業分野のなかの専業化傾向は必ずしもはっきりしないが，少数ながら綿商人や綿横糸取扱商が存在することはファスチアン織の横糸に用いられる綿糸の紡績や販売に専門化した商人が次第に登場していたことを示している。

その他の製造業分野についてみると，繊維関係に次いで多いものは機械器具製造の分野である。この部門は大きく分けて繊維工業を中心とする他の製造業分野へ機械・器具を提供する部分と消費財としての器具を生産する部分とに分けて考えることができる。生産財としての機械・器具生

第4表　機械製造業の構成

職業種別	職　　種	兼業業種	件　　数
繊維機械製造	筬 生 産		9
	織機生産		1
	スウイヴェル織機生産		1
	杼 製 造		1
小計			12
時計製造	置時計・懐中時計生産		1
	置時計生産		4
	置時計生産・兼業	焼き串生産	1
	懐中時計製造		4
小計			10
楽器製造	オルガン生産		1
	太　　鼓		1
	ハプシコード生産		1
	楽器製造		1
小計			4
輸送機械製造	造 船 業		2
	馬車（旅客）生産		2
小計			4
総合機械	車 大 工		2
	水車大工		1
小計			3
機械保守	機械保守（ロンドン型）		1
	機械保守		1
小計			2
そ の 他	旋盤業者		3
	外科医療器具製造・兼業	鐘釣るし業	1
	銃器等製造		1
	鉄砲鍛冶		1
	ポンプ生産		1
	ポンプ生産・兼業		1
小計			8
計			43

産で，関連性が高い分野はやはり繊維産業である。最も多いものは織機の「筬」生産者 reed maker で，9件を数える。しかし，他に繊維産業と関係するものは杼製造が1件，織機製造が2件にすぎない。旋盤・轆轤業者などが繊維機械の生産，少なくとも部品の生産にかかわった可能性もあるが，こうした関連は明白ではない。

産業革命後半になって動力装置として蒸気機関が導入され，紡績機も水力からミュールへ転換するようになると，機械工業もこれに応じて発展するようになる。こうした機械工業の発展には水車大工のような伝統的な熟練が大きな役割を果たしたが，マンチェスターで実際に繊維工業と関連しながら発展し始めるのは1810年代以降であった（道重［1995］pp. 29-31）。したがって，72年という工業化の初期段階にあっては，繊維工業と機械工業との間になお未だ積極的な関連性を見出せないことは当然であろう。

機械器具製造においては，消費財としての時計生産者や楽器製造を見いだすことができる。これらについては，他の消費財関連の製造業や木材加工業とともに改めて取り扱うことにしよう。

(3) 経営者数から見た経営形態

ここで視点を変えてマンチェスターの商工人名録に現れる情報から経営形態の状況を検討してみよう。商工人名録には人名の項目に複数の氏名が記されたり，“Co”という表記がなされる場合がある。また，男性とその息子あるいは息子達，また兄弟と思われる同姓で複数の男性氏名が記されることがある。数は少ないが，父と息子，また複数の女性の名前の組み合わせも存在する。これらの記載は複数の経営者からなる企業の存在を示しているものと思われる。親子関係がはっきりしている場合以外は，こうした記載が実際にどのような結びつきであるかを示す材料はないが，複数氏名の記載を2名以上の経営者からなる共同経営とすれば，男性のみの共同経営だけで100件，商工業者全体の約8％弱存在していることになる。

また既に述べたように，商工人名録には女性を示す表記がかなり見られ，何らかの形で女性だとわかる記載件数は161件で全体の一割を超えている。女性表記の場合，職業名が記載されないこともあるが，女性だとわかる名前のなかで職業名が判明するものは女性全体の約半数，83件である。

そこでまず，男性で複数の経営者とその各々の職業との関係，そして女性の場合，独身，既婚，寡婦などと職業との関係を整理してみよう。最初に男性について見ると，二名以上の他人同士の結びつきは51件と男性の共同経営全体の約半分を占めており，親子関係や兄弟よりも多い。もちろん，姓が異なるから血縁関係や親族関係がないと断定することはできないが，経営上の結びつきで血縁関係以外の要素にもとづくものが決して少なくないことは明らかである。その一方で，親子間で事業が共同経営されることはそれほど多くない。直接親と息子の共同事業と考えられるのは18件で，寡婦と息子という場合を含めても22件にすぎず，商工人名録全体からすれば極め

て僅かである。同一の職業を選択するかどうかは別として，親子が同一の経営を共同でおこなうケースは，一般的なものとはいえない。

次に複数の男性の経営と職業との関係を見てみよう。**第5表**からわかるように，こうした経営は繊維関係の製造業に多く見られることがわかる。この分野はマンチェスター全体の職業分布から見ても圧倒的な多数を占めているので，他の職業に比べて複数の男性による経営が多くなっても不思議ではない。しかし，チェック織やファスチアン織製造業者においては4分の1以上を占めており，ファスチアン織の染色業者の場合には11件中9件と大半が複数経営者の経営からなっており，マンチェスターの製造業において中心をなす分野においてこうした経営が無視できない存在となっている。これは資本の集積や経営拡大の一つの方法として，複数の経営者による共同経営の形態が珍しいものではなかったことを示すものといえよう[8)]。

一方，女性の経営で職業名が分かるものについてみると，かなり広範囲な職種におよんでおり，特定の職業に専門化しているわけではない。特に，寡婦以外の女性が服飾分野に集中する傾向を見せているのに対して，寡婦の職業が広範囲にわたっていることは，寡婦が死亡した配偶者の職業を継承した可能性を示すものである。デフォーは，「経営者はすべて，その妻が彼の商売に通じているようにすべきであり，彼の仕事の経営的な部分について，主人たりうるようにすべきである」(Defoe［1726］p. 291）と勧めているが，これは夫の死後その経営活動をつつがなく継承し，子供を養育するために必要であり，また息子に仕事を継承させることを容易にするためであった。配偶者の死亡と再婚が決して珍しくない時代ではあったが，残された妻が夫の仕事を継承することは，デフォーの指摘からすれば，少なくなかったように思われる。マンチェスターの商工人名

第5表　経営形態

	繊維産業関係						服飾品関係		乾物商	蒸留業者	その他	計
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧				
Co.		1				1					5	7
2　名	10	12	5	2	1	2	2		2	2	13	51
3名以上		1					1				2	4
男性と息子	1			1	2		1				9	14
男性と複数の息子							1				3	4
兄　弟						6		2		2	9	19
計	11	14	5	3	3	9	5	2	2	4	41	99
当該職業全体	43	57	37	13	5	11	20	5	25	5	—	—

注）第5表の①～⑧の内容は以下のとおり。
①check manufacturers, ②fustian manufacturer, ③smallware manufacturer
④fustian & check manufacturer, ⑤smallware & fustian manufacturer, ⑥fustian dyer
⑦hatter, ⑧milliners

8）共同経営の実態を示すものとして，19世紀初頭のものではあるが，R. オウエンの自叙伝（オウエン［1961］pp. 50-52）の記述を見よ。また，デフォーもパートナーシップの利点として経営の拡大が容易であることを指摘している（Defoe［1726］p. 215）。なお Alexander［1970］p. 212 をも参照。

録における，職業をもった寡婦の存在は夫の仕事を継承した妻の存在を示すものといえよう。さらに，4件と少数ではあるが寡婦と息子とが併記されている例が存在することは，寡婦を経由した父親の職業の継承の可能性を示唆している。

また，女性の経済活動は寡婦をも含めて飲食サービスや食料関係の商業活動に多く見られる。インについては38件中7件（18％），食料供給業者は85件中10件（11％）が女性の経営であり，さらに茶販売業 tea dealer は2件とも女性であった。呼び売り商も45件中10件（22％）と一定の比率を占めており，食料品関係の商業やサービス業は女性が営業を行いやすい分野であったと考えることができる。また，服飾関係の職業も女性にとって活動しやすい分野であった。この分野においては，寡婦が登場することは少ないが，女性の比率の高いものが多い。婦人服の生産 mantua maker は寡婦1件を含めて4件のすべてが女性による経営であったし，手袋業者も3件中2件が女性であり，喪服製造は2件すべてが女性であった。これらの服飾関係の職業は，その性格上夫の職業の継承と言うよりも，女性固有の職業領域を形成していたものと考えられ，女性が自立して営業活動を行いやすい分野と言うことができよう。

さて，この節では，繊維工業とそれに関連する商業，機械工業を中心にマンチェスターの職業構造を概観した。1770年代初頭のマンチェスターがファスチアン織を軸とする繊維生産に大きく依存する工業都市であったことは，概ね間違いはない。商工人名録登録者のなかで四分の一は繊維工業に直接かかわる職業に就いていることからも明らかであった。しかし，これらの職業からは，この工業都市の住民の消費活動がどのような形で展開したかを明らかにすることはできない。次節では，こうした点を中心に消費財にかかわる生産流通の構造について検討していくことにしたい。

3　消費財の流通構造

(1)　食料品の流通

消費財の供給は，18世紀イギリスでは伝統的な公開市場で行われるものから，次第に店舗によるものへと移行していった（道重［1989］p. 97）。商工人名録では，どのような種類の消費財が店舗によって販売されていたかを大まかな姿ではあるが，明らかにしてくれる。この節では最初に食料品の取引にかかわる職業を検討し，次いで服飾関係，そして最後に家具などのその他の消費財の取引について検討していくことにしたい。

ところで，消費財については製造と販売とを明確に区分しがたい側面がある。前節において全般的な職業構造を検討した際には，製造業と商業・サービス業などを比較的はっきりと区分して分析をおこなった。しかし，消費財を取り扱う職業については，しばしば生産者と販売業者が一

体であるいわゆる生産者／小売商 producer/retailer が重要な役割を果たしている（Jefferys [1954] pp. 3-4)。したがって，本節では製造業と販売業とを必ずしも厳密に区別せずに，むしろ製造・販売される商品の性格を中心に検討を加えていくことにしたい。

そこでまず，食料品のなかでも基本的な要素である穀物，パン類について見てみよう。穀物を取り扱う業者は，穀物代理商 corn factor が兼業を含めて 13 件と穀物商人 corn dealer が 1 件存在している。両者の合計は，非生鮮食料品関係の商人のなかでは乾物商 grocer に次いで多数を占めている。一方，ランカシャーは基本的には，穀物生産があまり発達していない地域であり，18 世

第 6 表　食料関係の職業

職　種	職種の内容	職種の詳細	兼業職種	件 数
食品加工	パ ン 屋	パン屋専業		11
		パン屋兼業	馬 貸 し	1
		パン(砂糖)屋		1
		パン(生姜)生産		1
		パン(生姜)屋		1
	小計			15
	蒸留業者			5
	醸造業者			3
	醸造業者・兼業		醸造・木材商人	2
	練り菓子製造			2
	菓子製造販売			1
計				28
食料商人	乾 物 商	乾 物 商		25
		乾物商・兼業	乾 塩 商	1
		乾物商・兼業	薬　屋	1
	小計			27
	肉　屋	肉　屋		15
		肉屋・兼業	食料供給業者	1
	小計			16
	穀物関係商人	穀物代理商		12
		麦 芽 商		2
		麦芽商・兼業	醸造業者	1
		穀物商人		1
		麦芽・穀物商人		1
		製粉業者		1
		麦芽売り商・兼業	呼び売り商	1
		種苗商・穀物代理商		1
	小計			20
	ワイン・ブランデー商			4
	乾 塩 商			3
	チーズ商			3
	茶 商 人			2
	油 商 人			1
	狩猟家・兼業		食料供給業者	1
	茶倉庫販売			1
	茶 販 売			1
	ホップ取引業者			1
計				80

紀末に州内で生産された食料は州内の消費量の4分の1を賄う程度であったといわれている(Scola［1992］p. 36)。したがって，これらの穀物取扱商は，主としてランカシャー以外の地域から穀物を買い入れる，仲買的な機能を果たしていたと思われる。しかし地域内の穀物取引がなかったわけではない。種苗商 seedman と穀物代理商を兼業しているものが1件と僅かながら存在してることから考えると，地域内の穀物生産者との取引をもち，種苗を販売するとともに穀物の買い入れに従事するものが存在している[9]。

穀物商の手によってマンチェスターに入った穀物は，パンに加工され，あるいは酒造業者の手に渡った。イングランド北部では，消費者自身が小麦粉とイーストをこねてパンを作る自家製造の伝統がかなり遅くまで残っていたとされる。この場合，パンを焼くにはパン焼き業者 bake house で焼いてもらうか，パン屋の竈を賃貸するかなどの方法があったが，こうしたパン焼き業者が1811年にはマンチェスターで4件あったと言われている（Scola［1992］p. 221)。しかし，その一方で1804年にはパン焼き業者は存在しておらず，もちろん1772年の商工人名録にもその名は現れない。他方でパン屋は1772年の段階で11件と一定の数を示している。また製粉業者の数も商工人名録には1件が記載されているのみで，消費者が穀物を製粉するための施設はこの他には見あたらない。もちろん，パン屋や穀物商達が製粉を代行する可能性もあるが，多くの消費者が自家製造をおこなっていたとするよりも，むしろパンを消費財として購入する傾向の拡大を示すもののように思われる。

さて，食料品関係の職業で最も多いものは乾物商の25件で，兼業も含めると27件にのぼる。この職種は，砂糖や茶などの非生鮮食料品を主として取り扱う食料商であるが，他にタバコやオートミールなどをも販売し，さらに19世紀になると糊や石鹸などをも扱う例が見られる(Blackman［1967］p. 114)。このうち茶は18世紀前半から半ばにかけて輸入関税が漸減したことも手伝って価格が低下し，その消費量も拡大した（角山［1980］pp.67-8)。これを反映して，茶などのより狭い商品に専門化した乾物商も18世紀後半になると登場するが（Mui & Mui［1989］p. 47)，こうした傾向はなおロンドンなどに限られ，地方都市では万屋的な性格が払拭されていたとは言いがたい。その点で1772年段階のマンチェスターにおける乾物商は，食料品を中心とする食料雑貨商的な性格をもったものと言えよう。

一方，乾物商が万屋的に食料品や雑貨品を取り扱っていたとしても，一般の店舗主 shopkeeper よりも対象とする顧客の社会階層が全般的に高いと指摘されている（Scola［1992］p. 209)。ところが，マンチェスターの商工人名録には純然たる店舗主は僅かに1件しか記載されていない。乾

9）製粉業者 miller やパン屋も北部では小麦や特にオート麦を取り扱っているし，醸造業者 brewer，蒸留業者 distiller，麦芽商 maltster など酒造に関係する業者も穀物を取り扱っていた点にも留意する必要があるが，ここではさしあたり穀物取引は穀物業者のみに限定した。Peren［1989］p. 239 を参照。

物商の対象としていた顧客層が比較的上層に限定されるとすれば，店舗主的万屋が他にも存在することが必要となろう。あるいは，この時期のマンチェスターの場合には乾物商の顧客がそれほど社会的に限定されていなかった可能性もある。また，取扱商品がそれほど限定されていない呼び売り商も，より広範囲に食料雑貨品を消費者に販売した可能性がある。また，乾物商や茶取扱商などから仕入れて市の内外へ販売して回った行商人の存在は，商工人名録には登場しないが，小売販売の有力な手段となりえた点にも留意する必要がある[10]。

これに対して生鮮食料品を取り扱う職業は，商工人名録のなかでは基本的に見いだせないが，肉屋はその例外である。肉屋は15件であるが，これは乾物商につぎ，穀物関係の商人と同程度の数字である。屠殺業者といった職業名が商工人名録のなかには登場しないから，ここでの肉屋は屠殺から食肉生産そして小売までを兼業するような存在であったと考えられる（Blackman［1963］p. 87)。その意味では，単なる商人と言うよりも生産者的な要素を含む存在である。牛，羊を中心とする食肉需要は，工業化にともなう都市人口の増加とともに拡大したものと考えられるが，18世紀までの正確な数字は明らかではない。しかし，人口に比べて肉屋の数は決して多くなく，生鮮食料品の販売と同様にやはり固定店舗以外の市場での販売などをも考慮する必要がある。

食肉を除く生鮮食料品に関する職業は，マンチェスターの商工人名録には現れてこない。野菜，鮮魚などの食料品は，市場での取引が一般的であったと思われる。公開市場の機能は18世紀になると次第に低下していくが，生鮮食料品の販売機能は依然として維持され，固定店舗との間には一定の相互補完関係が存在している（道重［1989］p. 90)。商工人名録のなかに生鮮食料品を扱う業者が存在しないことは，こうした傾向が18世紀の後半になっても依然として継続していたことを示すものである。

(2) 服飾品の供給

食料品とならんで人間の生活に不可欠な消費財である衣料品について，次に見てみることにしよう。19世紀半ばにミシンが発明されるまで衣料品，ことに衣服の生産は仕立屋による注文生産が一般的であったと考えられてきた。布地や縁飾り，ボタンなどの素材が織物商 draper らによって消費者に供給され，これらを消費者が仕立屋に持ち込んで衣服が作り上げられたのである。そこで，衣服や服飾品について，それらの生産と流通を一体のものとして検討していくことにしたい。

ジェントリ層は，自らが着用する特別な衣服についてロンドンの仕立屋にわざわざ注文することもあったが，日常着や使用人の衣服についてはもっぱら地元の仕立屋が利用された[11]。流行に

10) 店舗から巡回商人への卸売りについては，Alexander［1970］pp. 66-69 を参照。
11) Weatherill［1991］p. 298 を参照。また，ジェントルマンの購入の例としてバッキンガムシャーの Purefoy 家の例を見よ（Davis［1966］pp. 224-235)。その他，衣料品の購買に関しては Buck［1991］p. 218 をも参照。

敏感に反応して，新規の衣服を着用する必要があった社会層は，流行の中心である首都の洗練されたモードを必要としたのだが，一般的な利用を目的とする衣服は地元の仕立屋で生産されたのである。マンチェスターにおいて服飾関係の商工業に従事している数は，織物商を除くと 119 件であるが，そのなかでも仕立屋の数は兼業も含め 38 件と多く，消費財としての衣料品の供給において中心的な役割を担っていたものと思われる。仕立屋が男女を問わず衣服の製造に従事したのに対して，婦人服の製造に特化したものがマンツア業者 mantua maker である。この両者をあわせた 42 件の衣服製造業者が，消費者自身によって持ち込まれた布地等を加工して衣服を仕立てていた。

消費者に衣服の素材を提供していたものが各種の織物商 draper である。さらに絹織物商 mercer は，単に絹製品のみを取引するだけでなく，女性用の布地を広く販売することを常としていた[12]。マンチェスターの商工人名録においては，これらの商人のなかでは麻織物商 linen draper が 15 件で最も多く，次いで紡毛毛織物商の 7 件が続いており，この両者を兼業するものも 1 件存在する。既にマンチェスターの繊維工業に関して検討した際にも明らかなように，この地域では麻織物や毛織物の生産はファスチアン織などに比べて少なく，これらの織物はマンチェスターの領域外から仕入れられたものと考えられる。

さて，18 世紀の衣服の流行はデザインの変化によるところが少なく，婦人服の基本型はツーピースのローブかガウンであった。流行の変化を最も強く反映したものは，むしろ素材である生地の色や織り方の方にであった（Lemire［1991］p. 166）。このため織物商が流行にあうような素材を提供できるかどうかが重要な問題となった。これに加えて，フリルやレースなどの縁飾りあるいはボタンなどの小物も流行に左右された。これらの服飾材料は，もちろん仕立屋によっても購入されたと思われるが，同時に消費者によっても購入されている。中流ジェントリの家計においても，衣服の修理や再生は主婦の日常的な業務とされており，こうした際にその材料として服飾材料も購入された（Vickery［1998］pp. 150-51）。

服飾材料は，ボタン製造業者やコルセット製造業者などの生産販売をおこなう業者と小幅物製造業者による供給が考えられるが，具体的な経路を特定することは困難である。コルセット製造業者は 8 件と一定の数がマンチェスターの商工人名録には現れるが，その他の材料の生産者をこの史料からははっきりとした姿を見ることはできない。既に述べたように，18 世紀中葉にサセックスの店舗主 T. ターナーはマンチェスターのチェック織とファスチアン織の製造業者からリボン等を購入している（Vaisy（ed.）［1994］p. 245, 287）。マンチェスター地域の外への販売がおこなわれたとすれば，市内においてもファスチアン織製造業者や小幅物製造業者が織物商やミラノ商

12) 絹織物商については Alexander［1970］p. 129 を参照。なお，これらの商人は経営規模が比較的大きく，都市の中流階層や地域のジェントリを顧客としていたとされている。Mitchel［1984］を参照。

第7表　服飾関係の職業

職業種別	業　　種	取扱商品・職種	兼業業種	件　　数
織物関係商人	織物商	麻		15
	織物商	紡毛毛織物		7
	織物商	麻・紡毛毛織物		1
	織物商	ヴェルヴェット		1
	織物商・兼業		ミラノ商	1
	絹織物商			4
計				29
服飾品関係商業	ミラノ商			5
	馬ミラノ商			4
	毛 皮 商			1
	ズボン卸商			1
	宝 石 商			1
	ボタン商人			1
	ミラノ屋・兼業		織 物 商	1
	小幅物屋			1
計				15
服飾品関係生産	注文服生産	仕立て屋		37
		仕立て屋・兼業	食料供給業者	1
		婦人服製造		4
	小計			42
	帽子生産	帽 子 屋		20
		帽子屋・兼業	小幅物製造業者	1
		帽子屋・兼業	メリヤスズボン屋	1
		帽子屋・兼業	呼び売り商	1
		帽子・マント生産		1
	小計			24
	半ズボン生産			8
	コルセット生産			8
	メリヤスズボン生産	メリヤスズボン屋		6
		メリヤスズボン屋・兼業	倉庫業者	1
	小計			7
	手袋業者			3
	縫糸生産			3
	房縁製造			2
	喪服生産			2
	銀細工業者			1
	鯨骨裁断			1
	房・レース生産			1
	帽子裏裁断業者・兼業			1
	ボタン生産			1
計				104

へ服飾材料を販売していたことを否定することはできない。織物商も布地以外の服飾材料を販売していたから，彼らが織物とともに縁飾り，ボタンなどをも消費者へ小売で供給していたものと思われる。また，ミラノ商もこの時代の同業者の在庫に関する記録から見ると，テープやレースなどを大量に所有しており，服飾材料を小売する有力な一角をなしていた。マンチェスターでは，ミラノ商が兼業を含めて6件，小間物商が1件存在し，彼らが流行の普及に一定の役割を果たし

ていたものと思われる[13]。

これに加えて，呼び売り商の存在にも注目したい。織物商は卸売り機能をも持っていたと思われるから，服飾品についても固定店舗以外の呼び売り商が，服飾品の供給者として一定の役割を担った可能性も存在している。1754年の地方紙マンチェスター・マーキュリーには，この種の服飾品に関する告知広告が見られる。それによれば，スミスィ・ドア Smity Door の故スレーター夫人の店で織物類の販売がおこなわれるが，在庫完売で終了するとされている。これは店舗を一時的に賃貸した呼び売り商など移動商人の小売販売を示すものであろう[14]。

次に既製の衣料品について見てみよう。1772年のマンチェスター商工人名録に見られる既製の衣料品にかかわる職業からは，帽子，手袋，メリヤスズボン hose，半ズボン breech，などが販売されていた事をうかがうことができる。この中では，帽子屋 hatter の数が最も多く，兼業を含めて23件存在している。帽子は帽子屋で販売されるのとならんで，ノリッヂのミラノ商の在庫にも存在していたことからもわかるように，帽子屋以外の小売商人によっても販売されていた。したがって，帽子屋は製造とともに卸しや小売による販売をもおこなっていたものと思われる。一方，帽子はサテンや籐などの素材や色などに応じて各種取りそろえられ，またサンプルによってサイズに応じた販売もおこなわれていた[15]。したがって，帽子は注文生産ではなく，一定の見込み生産により帽子屋によって供給され，帽子屋は自ら販売するとともに小売商へ卸売りをしたものと思われる。

帽子屋に次いで多い職業は，半ズボン製造業者8件である。衣服の既製品としての販売は一般的に19世紀半ば以降のミシンの発明と結びつけて考えられてきた。しかし，実際には17世紀後半末になると軍隊の制服の供給を始めとして，既製服が一定の規模で大量に生産されていた事は明白である。また女性の衣服ではエプロンやガウン，男性ではメリヤスズボン，半ズボンなどが既製品として供給された（Lemire［1991］pp. 179-185）。マンチェスターの場合にはこの中でズボン類の製造業者は確認できるが，それ以外の既製服製造業者は見あたらない。また，既製服を取り扱う小売業者を商工人名録から確定することも困難である。もちろん既製服は古着として市場へ流入することもあり，この場合には市内に製造業者がいなくても公開市場などを通じて供給されうるが，やはり商工人名録の記載には反映されないことになる（Lemire［1991］）。

メリヤスズボンについては卸売商を自称するものが，商工人名録のなかに1件存在するから，製造業者→卸売商→小売商・呼び売り商といった流通経路が想定される。また，マンチェスタ

13）Clabburn［1977］には，ノリッヂのミラノ商の在庫目録が収録されている。
14）The Manchester Mercury, 29th January, 1754.
15）ノリッヂのミラノ商は，籐やサテンなどの各種帽子を在庫していた（Clabburn［1977］）。また，サセックスの小売商 S. ハッチはロンドンへの仕入れ注文書のなかで，サンプルとサイズに応じた注文をおこなっている。East Sussex Record Office FRE530 を参照。

ー・マーキュリー紙には，「金のどんぐり亭」Golden Acon にロンドンから移動商人が到着し，コルセット（stay）と子供用コートの販売を開始したとの告知広告が掲載されている[16]。しかし，こうした広告も婦人既製服の販売を明確に示すものではない。その意味で，婦人服を中心とする既製服の製造業者あるいは販売業者の存在は不明瞭で，マンチェスターにおいてはなお衣服の供給は仕立屋による注文服という伝統的な姿をとる比重が高かった可能性もある。織物商やミラノ商などによって布地や縁飾りといった素材が消費者に供給され，これを仕立屋が衣服に仕立てるというやり方が，商工人名録にあげられた取扱業者から見る限り，なお支配的であったように思われる。

最後に，服飾に関連して靴屋 27 件の存在が目を引く。一般に，都市においては食肉需要の拡大をともなって皮革の供給が増大するが，マンチェスターの場合には皮なめし関係の職業は tanner, curier をあわせて 5 件と多くはない。むしろ，都市人口の拡大が靴の需要を拡大させ，原料の皮革を移入して靴を市内で生産する業者の拡大につながったものと思われる。この意味で，靴屋が一定数存在することは，マンチェスターの消費人口の増大を示すものと言えよう。

(3) その他の消費財と流通

食料品と服飾・被服関係以外の消費財について，商工人名録からその供給業者を確認できるものは，石鹸，ロウソク，金物，陶磁器そして時計や家具などである。このうち石鹸とロウソクは，生産や販売を兼業しているものが過半を占め，獣脂を利用する点で工程が共通するこの両者の密接な関連を示している。しかし，いずれかの商品を取り扱う場合も含めて，これらの商品を取り扱う業者は合計で 11 件に止まっており全体としても少ないが，さらにこのうち石鹸に比重のある業者は 2 件のみである。ロウソクのなかでも蜜蠟ロウソクは極めて高価で一般的な消費者が利用することはあまり考えられず，専業での取扱業者の少なさもそれを反映している（ヒューズ（植松靖夫訳）［1999］pp. 3-4)。その一方で，比較的安い獣脂を用いたロウソクの製造販売と同じく獣脂を用いた石鹸を組み合わせた営業の方がむしろ多数を占めている。

一方，金物類についてみると，金物商もしくはそれを兼業しているものが 5 件，鉄商人が 6 件存在する。また小物商は toy と呼ばれたバックルやボタンなどの金属製品を取り扱っていたから，これらを加えた合計 12 件が金物取扱業者であるといえよう［**第 8 表**］。こうした金物類は真鍮加工業者，刃物生産者あるいは錫加工業者などによって供給された。例えば錫加工業者はフライパンや鍋などを加工する製造業者であり，ブリキ加工業者 white smith もこれに類似した職種であると思われる（Campbell［1747］pp. 180-5)。しかし，服飾品生産に分類したボタン生産者のような

16) The Manchester Mercury, 26th February, 1754.

第8表　家庭用雑貨の製造と販売

種　別	職　種	兼　業	件　数
蝋燭・石鹸関係	蝋燭商・石鹸商		3
	蝋 燭 商		2
	蝋燭商・兼業	1/10 税収入役	1
	蝋燭商・兼業	強制授産所責任者	1
	蝋燭・石鹸商兼業	タバコ商人	1
	石鹸卸売り・蝋燭商		1
	石鹸商・蝋燭商		1
	石鹸商・蝋燭商兼業	麻織物商	1
	小計		11
ブリキ加工			7
鉄 商 人			6
陶器販売			6
金物・小物(toy)	金 物 商		2
	金物商・小物商		2
	小 物 商		1
	小物商・金物商		1
	小計		6
タバコ商人			5
真鍮細工業者			4
錫加工業者			4
ブラシ生産			4
ガラス・磁器	ガラス商・磁器商		2
	ガラス商・磁器商兼業	運送業者書籍販売	1
	小計		3
ピン生産者			3
真鍮鋳物業者			2
樽生産者			2
パイプ生産者			2
パッテン生産者			2
かご生産者			1
ガラス研磨業者			1
カレンダー生産者			1
櫛生産者			1
黒球製造業者			1
総計			72

金属小物の生産者は僅かであり，マンチェスター以外から仕入れられた可能性が高い。

陶磁器を扱う業者は，陶器に関して6件，磁器については他業種との兼業を含め3件である。陶磁器は，18世紀に消費財として急激に普及したものであり，17世紀以前にはピューター製や木製が普通であった食器に替わって，あるいはこれらと並んで一般的な食器としてその消費が増大する。イギリスでは19世紀初頭に至るまでより高度な技術を要する磁器の国産化にはほとんど成功していなかった。王侯による擁護がヨーロッパ大陸における磁器生産の成功につながったが，イギリスではより大衆的な消費財である陶器の普及は見られたものの，磁器の広がりは限定的であった（Richard［1999］pp. 28-9)。陶器はウェッヂウッドを始めとする多数の製造業者が国内に存在し活発な販売活動を繰り広げたし，その中心地の一つはマンチェスターの南方30マイルほど

のストーク・オン・トレント周辺であり，マンチェスターへの陶器の流入はほぼ確実である。こうした事情が，磁器業者に比べて陶器業者が多数を占めた原因と思われる。一方，大半が輸入品である磁器の取扱業者3件は，そのいずれもがガラス商と兼業しており，この両者を単独に取り扱うものがいない点は，これらがなお高級品として取扱数量が限定されていたことを反映するものであろう。

その他，家庭用雑貨の生産販売についてみると，桶屋，パイプ製造，パッテン（高靴）製造，などがそれぞれ2件，ブラシ製造が4件，タバコ商が4件，商工人名録には現れる。こうした雑貨品の供給業者は決して多数とは言えず，またこれらの消費財は技術的なあるいは地域的な特殊性を特に必要とするものではないので，タバコを除けば周辺の農村部を含む地域経済圏のなかで供給されたものと思われる[17]。

さて，時計は陶磁器と並んで18世紀に入ってから普及した新しい消費財である。18世紀後半になるとフランスやスイスなどからの輸入も増加したことなどによって時計の価格は急激に低下し，20シリング程度の置き時計も現れ，普及に拍車がかかることになった（Thompson［1967］pp. 66-9）。マンチェスターの商工人名録では，置き時計と懐中時計の製造業者が兼業を加えて合計10件見いだされる［**第4表**］。これに対して，時計類の販売を明示した小売商は見られないので，時計製造業者が次第に普及し始めた時計の販売や修理などもおこなっていたものと思われる。だが，輸入品も含めた地域外から流入した時計の販売をも彼らが担ったかどうか，こうした点は商工人名録からは明らかにできない。また，少数とはいえオルガンやハプシコードなどの楽器製造業者の存在は，マンチェスターにおける都市的文化の広がりを示すものであろう。

最後に，この時代にあっては最も耐久性のある消費財である家具を取り上げることにしよう。家具は耐久性のある消費財であるから，衣料品に比べて流行に左右されることの少ない商品と考えられる。しかし，その一方で18世紀中流階層のなかで洗練された家具を求める傾向は，購入時点における最新流行のデザインを求めさせることにもなった。ことに家具が「表舞台」の装置として来客に対する展示物の性格をもつことを意図されているような場合，主人，所有者の趣味の良さを強調するものが求められることになった（Weatherill［1993］pp. 212-3）。家具デザインの基本的な形は変わらないものの，その装飾は変化し，18世紀の半ば以降，家具のパターンブックが発行されて各地にその流行が伝播することになった（Edward［1996］p. 144）。流行の中心はイングランドではロンドンであり，ロンドンから様々な形で流行の商品が各地へ伝播した。1753年4月のマンチェスター・マーキュリー紙の告知広告には，ロンドンからやってきたと自称する家具商が，三日間の限定で市場広場近くの「雄牛の頭亭」Bull's Headで家具を販売するとしている[18]。

17）このような生活必需品需要からなる「生活圏的市場圏」については，さしあたり道重［1989］pp. 69-71を参照。
18）The Manchester Mercury, 13rd April, 1753.

こうした移動商人はロンドンでの流行と安価を武器に，既製服と同様に店舗小売業者と競合している。

その一方で地方の都市でも伝統的な木材加工業とのつながりのなかで家具製造が存在していたのである。マンチェスターの場合，木材加工の分類では弓矢製造の1件だけを例外として，その他の42件の業者は，指物師，椅子製造業者，家具商などからなり，何らかの形で家具の製造販売にかかわっている。耐久性があって，商品の回転は決して速くないと思われる家具の取扱業者が，建設土木関係の業者よりも多く，仕立屋とほぼ同数と言うことは，家具の供給が市内の範囲を超えて，周辺地域をもその対象としていたことを予想させる。この時期，ランカシャー中部のカーンに居住していた中流ジェントリの女性，E. シャックルトンの日記によれば，家具の購入をカーン，マンチェスターそしてランカスターなどの町々からおこなっている（Vickery［1998］pp. 168-9)。したがって，日常的な食料品のような消費財よりも，家具にかかわる業者はより広範囲に供給をおこなっていたものと思われる。

4　おわりに

産業革命の初期にあって，工業都市としての基本的な性格をもったマンチェスターは，その基礎をファスチアン織を中心とする繊維工業にもっていたことは，従来から明らかにされてきたとおりである。しかし，その工業都市としての性格は，その内部に生産過程の集積をともなうものであったとは言いがたい。1772年の商工人名録は，その末尾に周辺地域に拠点をもつ多くの製造業者のマンチェスターにおける倉庫の一覧を掲載している。ボウルトンを始めとする周辺地域から119件にのぼる，主として製造業者がマンチェスターに拠点としての倉庫を構えたことは，マンチェスターがその周辺を含む地域の主要な集荷点をなしていたことの現れである。

本稿の職業構成の分析からも，マンチェスター製造業の重点が紡績・織布よりも染色・仕上げ工程におかれていたことを示している。また，この段階においては，繊維工業と機械工業といったマンチェスター市内における産業諸部門間のつながりも，はっきりとしたものではなかった。その点から言っても，マンチェスターの工業都市としての性格の内容は，製造業部門を特に強調すべきものではなく，むしろ生産と流通を含む拠点としての機能を重視すべきである。弁護士を中心とするサービス部門の職業が比較的多く見られることも，サービスそのものの提供とともに金融の結節点としての役割を反映するものと思われる。

一方，マンチェスターの都市的発展は確実にその人口を増大させた。1757年に約17100人の人口は，本稿で史料に用いた商工人名録が刊行された翌年の1773年には約22500人へと30％以上も増加している。こうした事態を反映して消費財を住民に供給する多様な業者が存在していた。

しかし，店舗経営における専門分化は決して大きくない。例えば食料品にあっては，パン屋や乾物商のような基本的な商人の存在が多数を占めており，生鮮食料品を含めてなお公開市場的な存在が大きな役割を果たしていたと推定される。

また服飾品・衣料品のような流行をより反映しやすい消費財については，むしろ伝統的な織物商と仕立屋を中心とする注文生産が重要な役割を果たしていたと思われる。ことに既製服の販売に関しては，店舗によるものは必ずしも多くはない。逆に，マンチェスター・マーキュリー紙の告知広告に見られるような，移動商人的なものの存在が，ロンドンからの流行を武器に断続的に販売をおこなっていたものと思われる。同様な傾向は，食料品や服飾を除くその他の消費財についても見られる。時計や陶器を始めとする18世紀に主に普及する消費財が，従来から存在するロウソクや石鹸などの消費拡大とともに，その姿を明確に現していることは確実である。その意味ではマンチェスターの商工人名録に現れる職業構成は，この時代の消費動向を正しく反映したものである。しかし，その数は人口の割に大きいものではなく，これを補い，また先進的な流行をその中心地から持ち込んでくる非店舗経営の移動商人の役割を見逃すことはできない。

本稿は，1772年の商工人名録という限られた史料を中心とした分析であって，その意味ではマンチェスターの当該時期における全体像を提示しえたとは言えない。しかし，本格的な工業化の開始期における都市が，周辺地域の物資や資金の流通拠点としての機能を果たしながら都市的発展を遂げつつあり，また増大する住民への店舗を中心とした消費財の供給が多様化していく姿を確認することはできたように思われる。同時にまた，その発展はまだきわめて初期的なものであって，製造業における産業部門相互の関連も未発達であるし，消費財においても店舗による供給は限定的で，商工人名録に現れてこない公開市場や移動商人の役割もまた見逃せないものがある。18世紀の後半の段階にあって，工業都市マンチェスターは，ようやくその本格的な発展の出発点にあったのである。

史料および参考文献

1　史料および同時代文献

East Sussex Record Office FRE　530

The Manchester Mercury, 13rd April, 1753, 29th January & 26th February, 1754.

Raffald, E. (ed.) [1772] *The Manchester Directory, For the Year 1772* (Manchester).

Vaisy, D. (ed.) [1994] *The Diary of Thomas Turner 1754-1765* (East Hoathly)

Aiken, J. [1795] *A Descripion of the Country from Thirty to Forty Miles round Manchester*

(London)

Campbell, R. [1747] *The London Tradesman* (London, 1747)

Defoe, D. [1726] *The Complete English Tradesman* (2nd ed.) Vol. I (London)

2 参考文献

Alexander, D. [1970] *Retailing in England during the Industrial Revolution* (London)

Anderson, B. L. [1969] "Provincial Aspects of the Financial Revolution of the Eighteenth Century" *Business History* 11-1

Atkins, P. J. [1990] *The Directory of London 1677-1977* (London)

Blackman, J. [1967] "The Development of the Rretail Grocery Trade in the Nineteenth Century" *Business History* 9-2

Blackman, J. [1963] "The Food Supply of an Industrial Town" *Business History* 5-2

Borsay, P. [1989] *The English Urban Renaissance, Culture and Society in the Provincial Town 1660-1770* (Oxford)

Buck, A. [1991] "Buying Clothes in Bedfordshire" *Textile History* 22-2

Clabburn, P. [1977] "A Provincial Milliner's Shop in 1785" *Costume* 11

Corfield, P. [1982] *The Impact of English Towns 1700-1800* (Oxford) 坂巻　清、松塚優三訳 [1989]『イギリス都市の衝撃』(三嶺書房)

Daniels, G. W. [1920] *The Early English Cotton Industry* (Manchester)

Davis, D. [1966] *A History of Shopping* (London)

Edward, C. D. [1996] *18th Century Furniture* (Manchester)

Everitt, A. [1973] "The English Urban Inn, 1560-1760" in Everitt (ed.) *Perspectives in English Urban History* (London)

Hudson, P. [1986] *The Genesis of Industrial Capital* (Cambridge)

Jefferys, J. B. [1954] *Retail Trading in Britain 1850-1950* (Cambridge)

Lemire, B. [1991] "Pedding Fashon" *Textile History* 22-1

Lemire, B. [1991] *Fashion's Favourite* (Oxford)

Makepeace, C. [1985] *Old Manchester* (Altrincham)

Mingay, G. E. [1976] *The Gentry, The Rise and Fall of a Ruling Class* (London)

Mitchel, I. [1984] "The Development of Urban Retailing 1700-1850" in P. Clark (ed.) *The Transformation of English Provincial Town* (London, 1984)

Mui, H. & Mui, L. H. [1989] *Shop and Shopkeeping in Eighteenth Century England* (London)

Peren, R. [1989] "Markets and Marketing" G. E. Mingey (ed.) *The Agrarian History of England and Wales* Vol. 6 (Cambridge)

Redford, A. [1939] *The History of Local Government* (London)

Richard, S. [1999] *Eighteenth-century Ceramics* (Manchester)

Scola, R. [1992] *Feeding the Victorian City* (Manchester)

Smail, J. [1999] *Merchants, Markets and Manufacture* (London)

Thompson, E. P. [1967] "Time, Work-discipline and Industrial Capitalism" *Past & Present* 38

Turnbull, G. L. [1979] *Traffic and Transport* (London)

Vickery, A. [1998] *Women and the World of Goods* (London)

Wadsworth, A. P. & Mann, J. de L. [1931] *The Cotton Trade and Industrial Lancashire 1600-1780* (Manchester)

Weatherill, L. [1991] "Consumer Behaviour, Textile and Dress in the late Seventeenth and early Eighteenth Centuries" *Textile History* 22-2

Weatherill, L. [1993] "The Meaning of Consumer Behaviour in late Seventeenth- and early Eighteenth-century England" J. Brewer & R. Porter (eds.) *Consumption and the World of Goods* (London)

Wilson, R. G. [1971] *Gentlemen Merchant* (New York)

コーフィールド, P. [1997] (坂巻　清, 松塚優三訳)「イギリス・ジェントルマンの論争多き歴史」『思想』873 号

角山 栄 [1980]『茶の社会史』(中公新書)

原 剛 [1982]「19 世紀英国の教育と労働階級の社会移動」『思想』691 号

ヒューズ, H. [1999] (植松靖夫訳)『19 世紀イギリスの日常生活』(松柏社)

道重一郎 [1989]『イギリス流通史研究』(日本経済評論社)

道重一郎 [1995]「産業革命期イギリスの熟練労働者とその意識」『立教経済学研究』48-3

道重一郎 [1998]「イギリス産業革命期における地域的商品流通の構造」『経済論集』(東洋大学) 23-1・2

道重一郎 [1999]「イギリス中産層の形成と消費文化」関口尚志, 梅津順一, 道重一郎編『中産層文化と近代』(日本経済評論社)

オウエン, R. (後藤茂訳) [1961]『オウエン自叙伝』(岩波書店)